

S03

下顎第二乳臼歯の萌出遅延の2例

○桑原 さつき

緒言：歯の埋伏あるいは萌出遅延は、全身的または局所的な様々な原因により起こるといわれており、乳歯の埋伏、あるいは萌出遅延の発生頻度は永久歯に比較して少ない。今回、歯冠の一部が口腔内に露出し、その後の萌出がみられなかった下顎第二乳臼歯の2例を経験したので報告する。

症例1：5歳4ヶ月 男児

左側下顎第二乳臼歯萌出遅延

左側下顎第二乳臼歯の歯根は完成しているが、咬合面遠心部は歯肉弁に被覆された状態のため開窓し、約3ヶ月自然萌出を待ったが萌出せず、牽引を開始。約4ヶ月で咬合平面には達していないが、挺出した上顎第二乳臼歯と咬合したため装置を除去し経過を観察した。

症例2：5歳7ヶ月 男児

右側下顎第二乳臼歯萌出遅延

2歳10ヶ月時上顎乳前歯の外傷性脱臼のため某小児歯科を受診し固定の既往があり、以降外傷の予後のため定期的に受診していたが右側下顎第二乳臼歯の萌出傾向が認められないことを指摘されていた。転居のため当院受診時には右側下顎第二乳臼歯咬合面はほぼ露出していたが右側第一乳臼歯と歯頸部と同じ高さであり歯根は完成していた。第一大臼歯の萌出時期で近心傾斜が増悪してきたため抜歯し、可撤式保険装置にて保険し、経過観察中である。

考察：本症例は2例とも反対側同名歯が正常に萌出していたこと、家族歴、既往歴より全身的な原因は考えがたいことより、局所的要因によるものと考えられる。下顎第二乳臼歯の萌出障害は、後継永久歯や第一大臼歯萌出に大きな影響を与えるため早期の適切な処置が求められる。

S04

完全埋伏歯に、開窓・牽引誘導を施した例（症例2例）

井上 正仁

井上歯科医院（徳島県吉野川市）

【続言】 日々の臨床で、永久歯への交換期における萌出異常を主訴に来院される小児は少なくない。今回、永久歯への交換期における萌出異常の中でも、後継永久歯歯胚の位置・方向に異常があるために正常な交換が行われない症例において、骨開窓し、後継永久歯の牽引を行い、永久歯の萌出を誘導した後、マルチブラケット法により配列を行った症例の報告を行う。

【症例】

患児：8歳1カ月の女児

初診：平成16年12月22日

主訴：①未萌出

現症：①並びに①①は既に萌出、②並びに②②は、1/2程度の萌出を認めたが、①は未萌出。X線診査により、①は逆生理埋伏歯であることがわかった。

【処置内容及び経過】 レベリングを行った後に、①②間にコイルスプリングを装着し、①の萌出スペースを確保。処置開始4カ月後には、萌出誘導余地が獲得できたため、骨開窓を行い、同時に①歯冠にリンガルボタンを装着し、パワースレッドにて牽引を開始した。その後マルチブラケット法により配列を行い、治療を終了した。

【考察】 混合歯列期の萌出異常の中でも、牽引誘導が可能な症例では、埋伏歯の位置・方向を正確に診断し、的確な開窓処置・牽引を行うこと、また同時にマルチブラケット法による萌出誘導・配列を行うことで、非抜歯で、正常咬合により近付けることができると考えられる。また、混合歯列期での牽引、及びマルチブラケット法による萌出誘導・配列を行うことは、後により理想的な咬合・顔貌を得るために、永久歯列での矯正治療に移行する際のファーストステップとして、重要な役割を果たすと思われる。（同様に、③深部の埋伏歯を牽引した症例を写真にて報告する）